秋岡氏のデッサンを基に設計された「どま工房」

特集

誕生から間もなく30周年を迎えるオケクラフトの生みの親であり、昨年秋に東京の目黒区美術館で開催された「ＤＯＭＡ秋岡芳夫展」で大きな反響を呼んだ（故）秋岡芳夫氏。

今回は、童画家、工業デザイナー、木工家、プロデューサー、道具の収集家…など多才な顔を持ち、そのユニークでユーモアのある思想と方法論で多くの人々に影響を与え続けた秋岡氏が、置戸に残した足跡などについて紹介します。

■秋岡芳夫という人

秋岡芳夫氏（1920～1997）は、「特急あさかぜ」のような大規模な工業製品から家電、カメラ、家具、事務用品に至るまで、さまざま分野のデザインを手がけた日本の工業デザイナーの草分け的存在であり、生涯、日本人にとっての暮らしを真剣に考え、デザインすることの本質を追及し続けた思想家でもあります。東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）卒業後、当時は珍しかったフリーランスの工業デザイナーとして仕事を始め、終戦後は、進駐軍の家具の設計・製作にあたりました。のちに秋岡氏の代表作となった「男の椅子」は広い座面に足を乗せてあぐらをかくこともできる木製の椅子ですが、そのエッセンスには当時の経験と影響が反映されていると言われます。1950年代には日本初の会社組織のデザイングループＫＡＫ（カック）を設立。カメラや家電のデザインを手がけるかたわら、学研の『科学』の付録のデザインにも取り組み、顕微鏡、飼育箱、バネやゴムの力で動く車など、機知に富んだ付録は子どもたちを魅了しました。1960年代終盤からは大量消費大量生産に沸く当時の日本の状況に危惧をいだき、「手の復権」を唱え、「消費者をやめて愛用者になろう！」と、生活者の視点に立った仕事による「本物」の発掘と普及に取り組みました。80年代には、東北工業大学を通じて過疎地域の復興に関わり、木材などの地域資源を活用したモノづくり推進の基礎を築きました。木材、木工への愛着は強く、木工に関する技法書も多数です。

■秋岡芳夫氏と置戸町

秋岡芳夫氏と置戸のつながりは、昭和58年の町民憲章推進大会に始まりますが、これには伏線がありました。置戸町は、昭和55年に「地場資源の付加価値を高める生産教育の推進」という考え方を盛り込んだ「第３次社会教育５カ年計画」を策定し、木材の町にふさわしい「木に親しむ日」を設けて木工に取り組みました。図書館には木に関する専用書架が開設され、公民館事業にはほとんど木工に関するテーマが組み込まれました。昭和57年には地域産業開発センターが開設され、町民